

伊藤芳夫氏は、1952 年から 1957 年にかけて、多くのギムノカリキウム(*Gymnocalycium*)種を記述しました。その多くは、エキノカクタス(*Echinocactus*)として、学術記載されていた植物をギムノカリキウムとして再記述したものでした。また、彼が記述したものは、国際植物命名規約(ICBN)に違反したものが多く、無効名(非正式名；*nomen invalidum*)となっています。

数少ない、有効に学術記載されたものとして、*G.megatae*(和名；翠盤玉)、*G.tudae*(和名；碧盤玉)、*G.onychacanthum*(和名；驚爪玉)があります。これらの種は、1933–1940 年頃、パラグアイで従軍



写真 1; *G.megatae* 原産地球由来のもの。
黒田芳明園が輸入、同じものが、
G.marsoneri の名前でも輸入されて
いた。 筆者栽培・撮影

記者として働いていた、A. M. Friedrich 氏が採取した植物の種子が起源で、ヨーロッパ経由、またはアメリカ経由で日本に輸入されました。その植物を伊藤芳夫氏が、1957 年、サボテン図説(*Explanatory diagram of Austroechinocactinae*)の中で学術記載をしました。伊藤芳夫氏の記述は、これら上記の 3 種を区別するだけの十分な情報が書かれていないこと、また写真では無く、彼の精緻なペン画が使われている(当時の印刷技術や本代を安く抑える為に仕方無かった。)ことが理由で、後世の学者や趣味家は、この 3 種について、明快な区別が出来ません。チェコの B.Schütz 博士は、1992 年、*Die Gattung Gymnocalycium*(ギムノカリキウム属)の中で以下のように記述しています。

……この種の発見と、輸入は A.M.Friedrich 氏のおかげである。彼はチャコ戦争の間、それまで未調査の Gran Chaco 地域を突き進む事ができた。そして其処から *G.friedrichii* 以外に、大きな円盤形状のカクタス

も見つけた。それは亀のように、地面に密接して押し付けられているように見えた。だから、それは、暫定的に *G.spec. tortuga* と命名された。……中略…… 伊藤芳夫氏は、この種(*G.megatae*)、そして更に二つの、つまり、*G.tudae* と *G.onychacanthum* を学術記載する事ができた。おそらく、単に成長形態に関して、取り上げているに過ぎない、そして同じ種である。我々の場合、主として、最近亡くなった、Brünn 出身の優秀な育種家、Z.Fleischer 氏が、種子から植物を育て、そして彼の観察によれば 3 つの種が問題になっている。しかし、彼は学術記載しなかった。有名な育種家 Jan Suba 氏もまた、Fleischer 氏から種子を手に入れた。詳しく言うと名称、*G.karwinskianum*、*G.piricarpum*、そして *G.rotundicarpum* の種子を手に入れた。全て裸名



写真 2 ; *G.rotundicarpum*
谷山氏栽培・撮影

(*Nomina nudum*)である。これらの名称の下に、時々、それらをコレクション中に見出す事が出来る。しかし大抵は、既に、収集家はそれらを、*G.megatae*、あるいは*G.tudae*として正しく呼んでいる。*G.megatae*そして恐らく、*G.tudae*と*G.onychacanthum*もまた、北西パラグアイの砂の多い場所で、完全に太陽から保護されて生えている。

G.Esser 博士は調査研究で滞在の過程で、パラグアイの二つの場所、詳しく言うと、Filadelfia の近く Mennoniten と Kolonie の間、そしてガーレー將軍要塞 (Fortin Gen. Garay) を訪れた。二つの生息地では、この植物は、かなり同じ様に見えた。それは暗緑色、殆ど黒緑色、そして、Filadelfia の傍の植物の場合のみ、幾



写真 3 ; *G.fricianum* 根岸氏由来のもの。森ノ木氏栽培、谷山氏撮影



写真 4 ; *G.fricianum* 40 年以上前の、Uhlig 種子、山田藤次郎氏実生のもの、*G.damsii* または、*G.anisitsii* 系統と思われる。
筆者栽培・撮影

分多く側芽を出しているように見えた。……中略……独立した種として学術記載された、*G.tudae* と *G.onychacanthum* は、変種あるいは、それどころか単なる品種に過ぎないと見なされている。しかし、我々がこれらの植物について、もっと経験を積むまで待つ事が、性急に移動組み換えを実行するより、良いことである。*G.fricianum Plesnik* もまたこの形態集合に属する。我々は小さな栽培植物のみしか知らない。そして正確な発見場所は知られていない。……

まず。*G.fricianum* については、チェコの I.Milt 氏によると、Plesnik 氏は *G.karwinskianum* を *G.fricianum* として、ドイツの雑誌 KuaS に学術記載した、として *G.megatae* と同じものあるとしています。が、*G.damsii* や *G.anisitsii* と思われるものが、流通しています。*G.tudae* や後ほど、詳しく述べる、F.Ritter 氏が記述した、*G.tudae* var. *bolivianum* についても、*G.anisitsii* 系統のものが、間違って流通しています。(写真 4,5 参照)

伊藤氏の *G.megatae*、*G.tudae*、*G.onychacanthum* の

B.Schütz 博士は、*G.megatae*、*G.tudae*、*G.onychacanthum* を同じ種の変異の中に入ると考えながらも、3 つの種をとりあえず、保持しました。B.Schütz 博士が、ここで述べている、*G.tortuga*、*G.karwinskianum*、*G.piricarpum*、*G.rotundicarpum*、さらには *G.fricianum* などの種は、*G.megatae*、*G.tudae*、*G.onychacanthum* として学術記載された一連の種に含まれるとしてい

ます。*G.fricianum* については、チェコの I.Milt 氏によると、Plesnik 氏は *G.karwinskianum* を *G.fricianum* として、ドイツの雑誌 KuaS に学術記載した、として *G.megatae* と同じものあるとしています。が、*G.damsii* や *G.anisitsii* と思われるものが、流通しています。*G.tudae* や後ほど、詳しく述べる、F.Ritter 氏が記述した、*G.tudae* var. *bolivianum* についても、*G.anisitsii* 系統のものが、間違って流通しています。(写真 4,5 参照)



写真 5 ; *G.tudae* var. *boliviense*

おそらく、*bolivianum* の間違い。
土屋氏より。谷山氏栽培・撮影

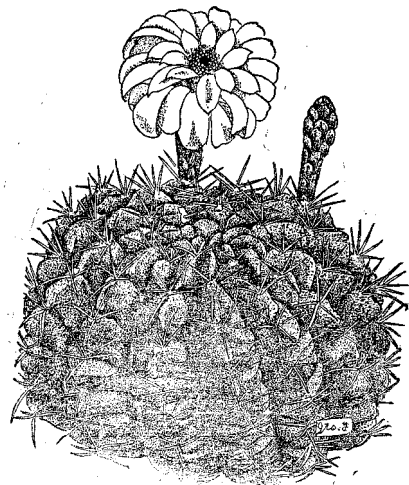
学術記載の内容に戻りましょう。サボテン図説の記述を表にすると以下のようになります。

表 1；サボテン図説の *G.megatae*、*G.tudae*、*G.onychacanthum* の学術記載一覧

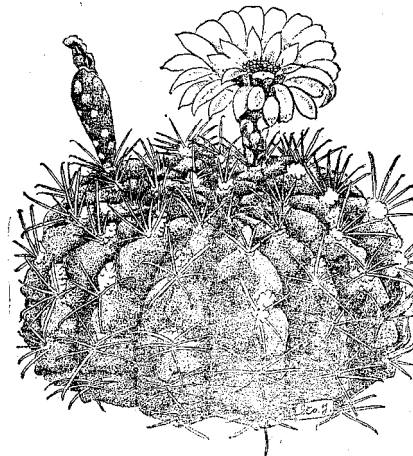
	<i>G.megatae</i> <i>Y.Ito</i> 和名；翠盤玉 目賀田守種氏に因む。 翠は汚れない緑色。	<i>G.tudae</i> <i>Y.Ito</i> 和名；碧盤玉 津田宗直氏に因む。 碧は青緑色。	<i>G.onychacanthum</i> <i>Y.Ito</i> 和名；鷲爪玉 櫛歯状の刺が、鷲の爪に似ている事より。
形態	単幹、円盤状、高さ 4－6×径 10－20cm。(15－20 cm)。	<i>G.megatae</i> より円盤状、高さ 6×径 17cm。	扁円状、径 10－20cm。径 15－20 cm。
体色	せいじ色。 <i>aeruginea</i> (緑青色)、赤茶色と言う意味も。 ※Ritter 氏の本では、“ <i>aerogineus</i> ” = <i>gruünspanfarbig</i> (緑青色) とある。	ビロード状の青緑色 (灰緑色) (<i>velutinus+glaucoviridis</i>)。 ※Ritter 氏の本では、 <i>velutinoglauco-viridis</i> <i>velutinoglaucos</i> は、ビロード状の青緑色から緑色。	青緑色。青緑色 (灰色) から緑色 (<i>glauco-viridis</i>)。
稜	9－13、角ばった円錐状の瘤。	9－13(14)、 <i>G.megatae</i> より長い、とがった瘤。	13－20、顎状。
刺	針状、外刺のみで 5 本、細く短い。長さ約 2cm、新刺は濃褐色－黒褐色(基部淡黄緑色)、後にねずみ色。	刺は、 <i>G.megatae</i> より多く、5－7 本(7 本まで)、先端はわずかに鉤状、新刺は黒褐色(基部淡黄緑色)であるが、後には暗色。緑刺は 7 本まで、先が尖っている、かろうじて先端が曲がっている。	刺は突き槍状、外刺のみで 7－9 本(9 本まで)、長さ約 3cm でやや櫛歯状に出ている。新刺は褐色(基部暗黄色)、後に灰褐色かねずみ色。櫛形状、灰緑色から暗い茶色 (<i>griseo-fuscus</i>)。
花	細い花筒の漏斗状、長さ×径は約 5cm、淡い青色。内弁は白色、外弁の中筋は淡草緑色。葯は暗黄色。花柱、柱頭は帯白色。	花は、 <i>G.megatae</i> より小さい、長さ×径は約 4cm。花筒は麦藁色。内弁は白色、外弁は先端および中筋が草緑色、特に先端が暗紅色の点がある。	細い花筒の小輪、長さ×径は約 2.5×3cm。内弁は白色、外弁は中筋が暗草緑色がかかり、先端はより膿色。花糸は白色。葯は暗黄色。花柱、柱頭とも白色。花筒は水色(濃い青色)で裸出し、僅かに鱗片を有す。
産地	パラグアイ	パラグアイ	ウルグアイ

※ 青字はラテン語による判別文で日本語の記載と異なる箇所を主に追加した。*G.onychacanthum* の産地、ウルグアイは間違い。*glauco* というラテン語は、青緑色とか灰色と言う意味があるが、青緑色で良いと思う。

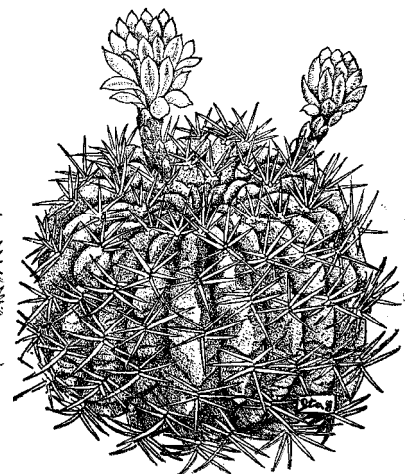
サボテン図説のペン画は以下のような図になっていますが、殆ど区別が付きません。和名から考えると、*G.megatae* は肌色が緑色、*G.tudae* は青緑色、*G.onychacanthum* は、櫛歯状の刺が、鷲の爪に似ていると言うことになります。



第174図 翠盤玉 (*Gymnocalycium Megalae* Y. Ito, nov. sp.)



第175図 碧盤玉 (*Gymnocalycium Tudae* Y. Ito, nov. sp.)



第176図 蟹爪玉 (*Gymnocalycium onychacanthum* Y. Ito.)

図1；サボテン図説の伊藤氏のペン画、左から、*G.megalae*、*G.tudae*、*G.onychacanthum*

F.Ritter 氏は、1979 年、彼の本、南アメリカのカクタス(Kakteen in Südamerika Band I Brasilien/Uruguay/Paraguay)の中で、肌の色、花の大きさなどから、*G.tudae* を *G.megalae* と区別して以下のように述べています。

……伊藤氏は Explanatory Diagram(日本の本)の中で、多数の他の種の他に、正確な調査と学術記載が不十分なために、不明確なままに留まっているが、*G.tudae* と、それに近縁で、*G.megalae* と *G.onychacanthum* の名前の2つを発表した。B.Schütz 氏は、チェコ語の雑誌、Kaktusy Jan. 1966 の中で、それらについて論文を書いた。その中で、彼は、少なくとも *G.tudae* と *G.megalae* は同じものであろう。そして恐らく *G.onychacanthum* も同じであろうと推測した。伊藤氏は、最初の2つはパラグアイ産、後者はウルグアイ産と申告した。その事は Backeberg 氏他により、疑問視され

ている。なぜなら、ウルグアイから、類似した外観のカクタスは、今まで知られていないから。周知のように由来の申告は、しばしば間違いと判明する。

Backeberg 氏は、このグループの更なる名前として *G.tortuga* HORT. (nom. nud.)を、短い学術記載を付けて載せている。しかし B.Schütz 氏は、それは完全に *G.megalae* と同じものであるだろうと明言する。Friedrich 氏は、かつて、パラグアイの Villa Militar の近くから一つのギムノカリキウムを発見した。その中から、彼は植物本体と種子を、Blossfeld 氏と Marsoner 氏に販売した。其処から、1937 年に、種子がヨーロッパと日本へ *G.tortuga* の名前でやってきた。そして個体は、日本に到着した種子に由来する。それを伊藤氏は、上記3つの名前で発表した。



写真6；*G.onychacanthum* 根岸氏由来のもの。 谷山氏栽培・撮影

上で名前を挙げた発見場所 Villa Militar の北西およそ 50km、私は Filaderfia の近くで一つのギムノカリキウムを見つけた、それは、この名前のグループに属している。正確な比較は、それは

G.tudae に一致する事を示した。この発見に基づいて、私は、G.tudae と G.megatae (そして、同じくらい少なく G.onychacanthum) は、同じものであるという事を承認しない。G.tudae の場合、7 本までの、明るい茶色の突き錐形状の縁刺、と申告されている。先端のみ、より暗い色、伊藤氏の場合、写真(図)によれば、刺の先端は小さな斧形状 (feinen Häckchen) で終わっている。そのような事は Filaderfia の種にも該当する。それに対して、G.megatae の場合、5 本の縁刺までと申告されている。刺は細いようである。そして写真は、終端の斧形状を示していない。

B.Schütz 氏は G.tortuga に対して、それは Villa Militar から来たらしい、同じような、僅か 3 本の黒い刺を報告している。そして斧形状については、何も言及していない。つまり、おそらく G.tortuga を G.megatae に関連づけられるだろう。そして G.tudae には、関連付けられないだろう。G.megatae の場合、伊藤氏により、判別文 (Diagnose) の中で、胴体色として、“aerogineus” =gruünspanfarbig (緑青色) と申告した。その代わりに Backeberg 氏は適切でない“明るい緑色”をあてがった。G.tudae の場合、伊藤氏は “velutinoglauco-viridis” と申告した。 ; velutinoglaucos は、ビロードのような青緑色を意味

する、viridis は緑色を意味する、つまりそれは、大体、青色に移行している、緑色を意味するだろう。ビロードのような外観は、Filaderfia の種でも、特に、私の目を引いた。その場所の個体は、非常に暗緑色である、青みがかかっているのが、しばしば知覚される。日光が当たった場合、個体は茶緑色になる、そして最終的には赤茶色にもなる。花の長さとして、伊藤氏は G.tudae に対して 40mm を申告している、それに対して、Filaderfia 産の個体の花の、私の計測値は 35mm から 45mm である。伊藤氏は、G.megatae に対して、50mm の花の長さを申告している。G.megatae の花筒は伊藤氏により “azureus” =blau(青)と申告されている。 : Backeberg 氏は、これを、再び不適切に “reifig (粉を吹いている)” と与えた。G.tudae に対して、伊藤氏は “stramineus” =strahfarben(麦藁色)を申告した。Filaderfia 産の個体の花筒は、灰緑色である。麦藁色は、枯れた場合初めて発生する。いずれにせよ、花筒は決して青ではない。全ての事に基づいて、私は Filaderfia の種を G.tudae に置く、それを G.megatae と見なさない。伊藤氏はその上、Frić 氏のある名前を取り上げた。それは、この類縁関係に属しているように思える。 : G.marsoneri、彼はそれに対して、学術記載を提供した。しかし Frić 氏が 40 年以上前に G.marsoneri として呼んでいたものは、今日、最早正確に確認しえない。だから伊藤氏は、そもそも、この名前を使う事は、認められないだろう。伊藤氏によると、この種はアルゼンチンに由来するらしい。Backeberg 氏は、伊藤氏の学術記載を再録し、それに若干の写真を提供した。しかし、これらの写真は、伊藤氏が与えた絵とは、強く逸脱していた。そして、どちらかと言うと、はるかに多く G.tudae に関連づけられねばならない。写真はそれ(G.tudae)にふさわしい。しかし G.marsoneri は幾分 G.tudae とは別物である。例えば花は、内花卉の点では異なっている、内花卉は、G.tudae の場合、垂直に立っている、大きく開く。その結果、花の開口部



写真 7 ; F.Ritter 氏が、G.tudae と考えた Filaderfia 近くの種、Kakteen in Südamerika Band I よりコピー

は、はるかに広い。その上、内花弁は *G.tudae* の場合、常であるように、小さくならない。更にそれは(内花弁)は黄白色である、*G.tudae* の場合白である。；稜の瘤は、伊藤氏の絵によると、少し丸みがかかる。そして刺座は、切り込みの中に在る。一方 *G.tudae* は、刺座を伴った斧形状の瘤を持つ。刺座は瘤の上か、あるいは、瘤の上腹部（上の平らな部分）にある。つまり、Backeberg 氏が伊藤氏の *G.marsoneri* として解釈した写真は、何か全く別物である。以下では、*G.marsoneri* と記された、Backeberg 氏の場合の写真は、*G.tudae* と見なされなければならない。……

また、F.Ritter 氏は、1980 年、南アメリカのカクタス(Kakteen in Südamerika Band II)で、ボリビア産の *G.tudae* 変種 *bolivianum* を発表しました。この種は、Boyube 近くで、頻度高く生えているとしています。

Ritter 氏の *G.tudae* var. *bolivianum* 学術記載と解説は以下の通り。

……*G.tudae* var. *tudae* に対する違いは（括弧の中は、これ (var. *tudae*) に関する申告）、胴体は



Abb. 686 *Cylindropuntia tudae* var. *bolivianum*.

写真 8; F.Ritter 氏の *G.tudae* var. *bolivianum*
Kakteen in Südamerika
Band II よりコピー

灰緑色、稜は、全般的に、幾分より低い。刺はより細い、平均的には、だいたい同じ長さ。花は、長さ 45mm から 55mm (35mm から 45mm)。子房は 17mm から 20mm(9mm から 12mm)。花糸、蜜室に蓋をしている花糸の輪は、毛が生えている (bewollt) (同じように毛が生えているかどうかは、はっきりしない。) その上は、約 4mm の付着点隙間 (約 2mm)。花、申告は var. *bolivianum* は 4 つの花から得られた。var. *tudae* は、その都度の生息地の異なる個体例の 2 つの花から得られた申告である。果実は、長さ 30mm から 40mm、茶色っぽい赤、少し青の粉を吹いている(25mm、淡い緑色 (いつも?))。果肉は、幾分ピンク色(白色)。種子は、幾分暗い茶色。そして目の粗い疣々が付いている。基準標本生息地は Cordillera 州、Boyube、其処から 40km 西でも稀に見つかる。私により 1963 年に発見された。当然のことながら、これは、同じように、Boyube 近くで、はるかに頻度高く生えている、*G.pflanzii*、それは最近 Cardenas 氏により *G.chuquisacanum* として発表された、それとは、

全く別の種である。上で載せたように番号は FR 1133、(var. *tudae* は、FR 1180)

var. *bolivianum* の基準標本生息地は、およそ 400km、Filaderfia から離れている。Filaderfia は、私が var. *tudae* を見つけた所である。A.Friedrich 氏は、1965 年、*G.tudae* をパラグアイの Nueva Asuncion の傍でも見つけたと報告した。Boyube から 140km 東である。より少ない間隔に対応して、この発見物は *G.tudae* var. *bolivianum* に属すると推測される。

G.tudae var. *bolivianum* の基準標本として、1963 年に、私により、国立ユトレヒト大学に、上記 FR 番号



写真 9 ; *G.brevistylum* n.n. FR1133

Winter 種子 山田藤次郎氏実生、
筆者が栽培していたが、大分前に
枯れてしまった。

と、*Gymnocalycium brevistylum* の名前で、一つの植物標本館資料が寄託された。裸名に留まっている、この名前は、私がこの基準標本は *G.tudae* に属していると思なした後に、私によって放棄された。……

F.Ritter 氏は、パラグアイの Villa Militar 近くの植物を *G.megatae*、Filaderfia 近くの種を *G.tudae*、ボリビアの Boyuibe からパラグアイの Nueva Asuncion にかけての植物を *G.tudae* var. *bolivianum* と考えたと思います。

ボリビアの Boyuibe 近くの植物で、*G.eytianum*(和名；栄次丸)と言う種があります。この種は M.Cardenas 博士が、*G.pflanzii*(和名；天賜玉)系統に属すると考えて、学術記載した種でした。

M.Cardenas 博士は、ボリビアの *Gymnocalycium*(Die Gattung *Gymnocalycium* in Bolivien, KuaS 9(2) : 21-27(1960))の中で以下のように書いています。

……観察事項；この種は、外観で *G.pflanzii* Vaupel や *G.lagunillasense* Card.を想起させる。けれども、その非常に少ない棘の総数、しかし、特にその長い子房、それは、この像にとっては普通では無い、により異なっている。この種の花の色は純白で花柱も同じ色である。花柱は、このボリビア属の他の種の場合、普通はマゼンタ系赤色の色になる。……



写真 11 ; *G.eytianum*=*G.itatiquense* sensu Till & Amerhauser, STO969 ; East of Boyuibe, Santa Cruz, Bolivia, 885m Amerhauser 氏種子、土屋氏実生、筆者栽培・撮影

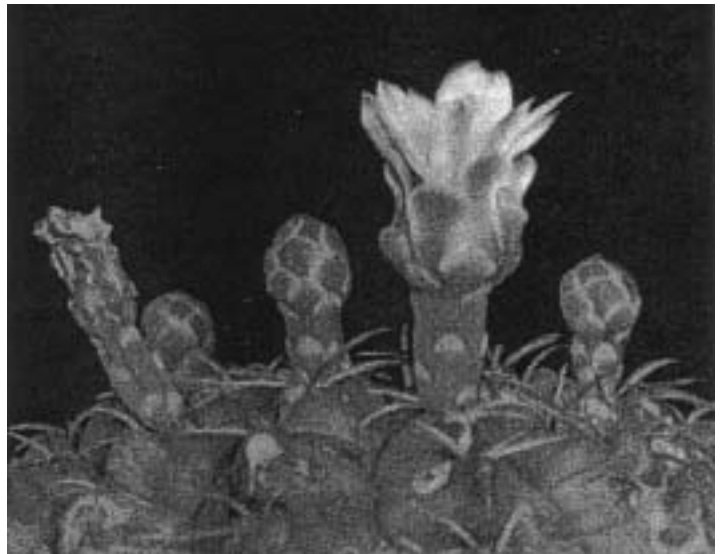


写真 10 ; *G.eytianum* Card. nov. sp.

KuaS 9(2) : 21-27(1960)の写真コピー

この種は、写真から見れば、明らかに *G.megatae* 類縁種のように見えます。しかし、AGG(オーストリアのギムノカリキウム愛好家グループ)の H.Till 氏と H.Amerhauser 氏は、M.Cardenas 博士が学術記載した種は、学術した記載文の内容、産地からして、*G.friedrichii* 類縁種であるとし、*G.friedrichii* subsp. *eytianum* (Cardenas) H.Till & Amerhauser として学術記載しました。一方、M.Cardenas 博士の写真のような種を *G.itatiquense* H.Till & Amerhauser として、別に学術記載しました。(Gymnocalycium 22(4) : 891-896(2009))

G.friedrichii subsp. *eytianum* は、*G.friedrichii* var. *albiflorum* ともされている種で、*G.megatae* 類縁種ではありませんが、この *G.eytianum*=*G.itatiquense* sensu Till & Amerhauser は、F.Ritter 氏が、*G.tudae* var. *bolivianum* とした種と同じように思います。

H.Till と H.Amerhauser 両氏は、最新の AGG 誌 *Gymnocalycium* 23(4) : 959-968(2010)の中で、

G.megatae の異名同種(Synonym)として、G.tudae var. bolivianum の名前を挙げていますので、彼らは、G.tudae var. bolivianum sensu Ritter と G.itatiquense sensu Till & Amerhauser は別種と考えているようです。

伊藤氏は、G.tudae と G.megatae の違いとして、肌の色、刺の太さと本数、花の大きさなどを書きましたか、不正確な為に、伊藤氏が記述した、刺の細さに着目して、G.tudae var. bolivianum、あるいは G.eytianum=G.itatiquense sensu Till & Amerhauser が、G.tudae であると理解しているような人も見られます。(Field 番号より)

G.megatae とその品種に関して記述した AGG の最新号で、H.Till と H.Amerhauser 両氏は、G.onychacanthum の学名の由来を onyx color の刺として、恐らく G.friedrichii (Werderm.) Pazout ex Schütz の多様の形態の一つが問題になっているのだろうと書き、全く間違った解釈をしています。

「onycha」と言うのは、「爪」という意味であり、和名から分かるように、鷲の爪を意味しており、オニキス(黒メノウ石)の色から来ていると考えている H.Till 氏と H.Amerhauser 氏は誤解しています。G.onychacanthum の肌色は、伊藤氏は、青緑色としていますが、オニキス色を肌色と考え、F.Ritter 氏が、G.tudae とした、パラグアイの Filaderfia 産の個体を G.onychacanthum としている Field 番号があります。(HU316 (Leopoldo Horst) ; Filadelfia, Boqueron, Paraguay)

H.Till と H.Amerhauser 両氏は AGG の最新号で、著しく側芽を出して密生して成長する G.megatae 類縁種を花や種子の記述なしに、G.megatae subsp. zecheri Amerhauser として学術記載しました。その学術記載は以下の通りです。

……新しい亜種は、基準標本形態 (Typusform) とは以下の点で異なる。: 大きな集団で生えている、そして強く側芽を出す事により、20 個までの頭を持っている。単一の頭 (個体) は直径 150mm から 180mm で、紫色を帯びた褐色の表皮を持つ。11 個から 15 個の鋭い稜、及び明るい灰色の真っ直ぐで、力強い、そして大抵突き出している、長さ 10mm から 15mm の刺。花、果実、種子は、当時の乾燥した時期には観察できなかった。

自生地: パラグアイ、Boqueron 州、Colonia Neuland、Hohenau の傍、海拔 185m。

新しい亜種は Schönbrunn (ウィーンにあるかつての皇帝の居城) の多肉植物コレクションの以前の栽培指導者で、かつ “Neuer Resevegarten” の技術的経営指導者の技師 Ernst Zecher 氏に因んで命名された。

学問的な目的のためでも、産地国の輸出許可とオーストリアへの持ち込む輸入許可無しには、自然から植物を取り出す事の無意味な禁止が理由で、花、果実、そして種子を知るようになるために、比較的大きな在庫量 (現地の生息数) から 2 つの開花能力のある個体例を取り出す事は出来なかった。それ故、正基準標本として、枯死した若枝のみが寄託可能であった。……

以前の AGG では、花や種子の記述なしに、学術記載することは、考えられなかったように思います。現地を数度も訪問し、発見後、時間をかけて学術記載していたように思います。想像ですが、最近、一部のチェコの人達が、正確な調査なしに、正式な体裁で学術記載しているので、焦っているのかも知れません。

G.megatae subsp. zecheri の学術記載で、強く側芽を出す事は、環境の要因があり、特徴にならないのではと考えています。ここで書かれている、「紫色を帯びた褐色の表皮を持つ。」と言うことに着目しました。この種は、F.Ritter 氏が、G.tudae とした種であり、Volker Schädlich 氏が、彼のホームページで褐色肌の G.megatae(VoS01-03 ; Towards Hohenau, Colonie Neuland, in the open

bitter grass, Boqueron, Paraguay)とした種ではないかと考えました。V.Schädlich 氏は、*G.megatae* 類縁種の専門家であり、Amerhauser 氏とは、異なる意見を持つ人です。早速、彼にメールを出して意見を聞きました。彼は、種を比較的広く捉えるので、ここで、前述した、多くの分類学種は、*G.megatae* と考えています。彼も、H. Amerhauser と H. Till の説明に、疑問を持っていますが、以下のような返事をもらい、ある程度の頭の整理ができました。

……*G.megatae* の生息地は、西では、ボリビアの Boyuibe/Charagua です。パラグアイでは、生息地は北東に広がっています。以前、貴方の質問に答えたように、*G.eytianum*(*G.itatiquense* のこと)は、単に分類群だけであると思っています。私の考えでは、Boyuibe/Charagua と Filadelfia の間で見つかる



写真 12 ; Schädlich 氏のホームページに載っている *G.megatae* VoS01-03

るすべての植物は、1 つの種です。他の Chaco *Gymnocalycium* と同様に、この種は、むしろ変化します。種、花と果物は、見分けがつかないです。F.Ritter によると、*G.brevistylum* は、無資格名のままだったので、彼は、彼自身の名前を撤回して、これらの植物が名前 *G.tudae* 変種 *bolivianum* としました。彼は Boyuibe の近くで、それらの見本を見つけたので、私に関する限り、それらは *G.megatae* です。*G.megatae* 亜種 *zecheri* の説明は、完全に不必要でした。私は Amerhauser 氏に、これについて話して、そのうえ、彼に人が新しい分類群を解説することを決めるならば、それは、慎重でなければならないということを知らせました。種、花、果物と苗なしで新しい亜種を記述すること



写真 13 ; *G.griseopallidum* 、黒田芳明園が輸入した、原産地球、筆者栽培・撮影

とは、可能でありません。芽キャベツのふるまいは、他の植物への唯一の際立った特徴として挙げられます。あなたが述べたように、このふるまいは、同様に他の個体群でも見つかる例外です。植物は、私の VoS 3、VoS 562(east of Blumenthal, Alto Paraguay, Paraguay 132m)と VoS 563(Colony Neuland, Boqueron, Paraguay)と非常に類似しています。これらの植物のための F.Ritter 氏の指定は、*G.tudae* でした ; Amerhauser によれば、それは *G.megatae* 亜種 *zecheri* です。……

C.Backeberg 氏が最初に記述した、*G.megatae* と関係があるとされる、*G.griseopallidum* と *G.pseudo-malacocarpus* も未解決な問題をかかえる種です。H.Till と H.Amerhauser 両氏は、*Gymnocalycium* 16 (3) 523-532(2003)で、Backeberg 氏の記述が無効だったので、それらの種を有効化しましたが、二つの種を

G.anisitsii の変種 (*G.anisitsii* var. *pseudo-malacocarpus* Backeberg ex Till & Amerhauser と *G.anisitsii* var. *griseopallidum* H.Till & Amerhauser) としました。*G.griseopallidum* については、Backeberg 氏の記述した植物とは、大分違うように思います。彼らは、*G.griseopallidum* について、

Santa Cruz 州、Cerro Miguel 近くの Ravelo 陸軍基地近くの植物(HA95-986)を *G.anisitsii* 変種 *griseopallidum* としました。その理由として、H.Till 氏が 1964 年に Uhlig 商会で、「Backeberg 氏 学術記載依頼品」とある植物を知っていて、それと同じ種であると言うのが、理由です。しかし、Backeberg 氏の写真や現在、流通しているものとは大分異なるように思います。*G.pseudo-malacocarpus* については、Backeberg 氏の記述したものと同じであると思いますが、流通しているものには、*G.griseopallidum* との中間種のようなものがあります。2009 年、種の概念について、より広く捉える Graham Charles 氏は、彼の著書「*Gymnocalycium in Habitat and Culuture*」で、*G.griseopallidum* を *G.anisitsii* ssp. *damsii*、*G.pseudo-malacocarpus* を *G.marsoneri* ssp. *megatae* としました。Charles 氏は、*G.megatae* を *G.marsoneri* の亜種と考えているようです。



写真 14; H.Till 氏と H.Amerhauser 氏が、*G.anisitsii* var. *griseopallidum* とした HA95-986、Amerhauser 氏種子、土屋氏実生、筆者栽培・撮影

V.Schädlich 氏は、個人的な連絡で、Backeberg 氏の *G.griseopallidum* に合致する植物は、A.Lau 氏の L368 のように思うが、Cerro Miguel からの植物とは異なると思うとの事でした。彼は、*G.griseopallidum* と *G.pseudo-malacocarpus* は同一の種であると仮説を立て、*G.megatae* の亜種に相当すると考え、調査中であるとの事です。

学者や趣味家により、種や亜種の捉え方が違うので、全く同じ種が、違う名前で呼ばれる場合があります。一方、本来、無関係な種が、同じ名前とされる場合もあり、要注意です。将来的には、遺伝子分類が発達し、現在の「生物学的種概念」に代わる、新しい分類体系が出来ることを期待しますが、

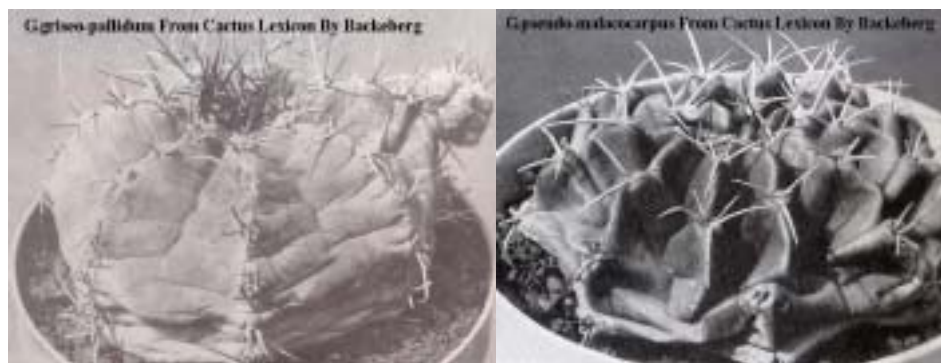


写真 15 ; *G.griseopallidum*(左)と *G.pseudo-malacocarpus*(右)、C.Backeberg 氏、Cactus Lexicon(1976)よりコピー

当面は、産地情報(Field 番号)が、種の判断に重要な役割を持つと思います。*G.megatae* 類縁種の分布地図と Field 番号の一部を示した地図を作製しました。(最後のページ) この地図から分かるように、

G.megatae 類縁種に関して、まだ、学者や趣味家の考え方が一致していないのが、分かります。

話が変わりますが、伊藤芳夫氏は、彼が学術記載した時に、既に故人であった、目賀田守種氏(*G.megatae*)と津田宗直氏(*G.tudae*)に因んで名前をつけました。津田宗直氏は、昭和の初期にサボテンの栽培法を確立した人で、サボテンの趣味家なら、名前を知らない人はいないと思います。目賀田守種氏については、殆ど知られていないので、少し、書いてみたいと思います。1917 年、京都市生まれ、京都一中から三高、京都帝大農学部に進み、主に熱帯植物やサボテンの分類に興味を持ち、研

究をされました。三高時代にすでに、サボテンの専門家であり、1939年には、アメリカ・カクタス協会誌に「日本に於ける 300 年」と言う論文を寄稿し、アメリカ・カクタス協会の名誉副会長に推薦されたそうです。大学入学後は、東南アジアに自生する多肉植物や、サボテンと多肉植物の染色体数などの研究に取り組みました。1942 年、卒業論文として、奥村義雄氏の *Astrophytum*(有星類)の研究を再構築した、新しい分類体系を発表しています。(京都帝国大学農学部紀要 1944、「An Account of the Genus *Astrophytum* LEMAIRE」) この論文は、*Astrophytum* の研究者には、現在でも広く知られている文献のようです。卒業後、第二次大戦で、海軍大尉として勤め、1945 年、フィリピン、レイテ沖の海戦で戦死しました。享年 28 歳でした。

まとめ

Field 番号を元にし、*G.megatae* 分布図を最後のページに示します。この分布図が、これまでに述べたことを示すと共に、研究者や趣味家で、種の捉え方が、かなり異なり、混乱していることが分かります。

G.megatae 関係種の学名記載の時系列と現況を整理すると 以下の表 2 のようになります。

最後に、本稿を書くに当たり、写真など、多くの情報を提供して頂いた、谷山宰氏、ドイツ語文献の翻訳を提供して頂いた、島田寿男氏、丁寧に私の疑問に答えて頂いた、V.Schädlich 氏に感謝致します。

表 2 ; *G.megatae* 関係種の学名記載の時系列

1957	Gymnocalycium megatae <i>Y.Ito</i>	→G.megatae
	Explanatory diagram of Austroechinocactinae: 292, 172 (1957).	
G.megatae、G.tudae、G.onychacanthum の学術記載が不明瞭な為、G.megatae とその品種レベルに留める。		
1957	Gymnocalycium tudae <i>Y.Ito</i>	→ G.megatae
	Explanatory diagram of Austroechinocactinae: 292, 172 (1957).	
同上		
1957	Gymnocalycium onychacanthum <i>Y.Ito</i>	→ G.megatae
	Explanatory diagram of Austroechinocactinae: 292, 173 (1957).	
同上		
1958	Gymnocalycium eytianum <i>Cardenas</i>	→G.friedrichii subsp. eytianum →G.itatiquense
	Die Gattung Gymnocalycium in Bolivien.-KuaS 9(2): 25-26 (1958).Ergänzung in KuaS 11(3): 46-47 (1960).	
二つの分類学種に分かれる。G.itatiquense については、G.megatae に含まれると言う、考え方が残る。		
1959	G.tortuga <i>Blossfeld ex Backeberg</i> nom. inval. (Art.8.2, 37.1)	→ G.megatae
	Die Cactaceae 3: 1784 (1959).	
1960	G.karwinskianum nom. nud.	→ G.megatae
	in Pazout, Valnicek, Subik: Kaktusy: 105 (1960). vgl. Pazout: Friciana 4(23): 13 (1964).	

1960	G.rotundicarpum nom. nud.	→ G.megatae
	in Pazout, Valnicek, Subik: Kaktusy: 105 (1960).	
1964	G.fricianum <i>Plesnik</i> nom. inval. (Art.37.1).	→ G.megatae G.anisitsii or G.damsii
	G.fricianum <i>Plesnik</i> · KuaS 15(6): 110 (1964)	
Plesnik 氏が、記述したものは、G.megatae、間違っ、G.anisitsii や G.damsii 系のものが流通している。		
1966	Gymnocalycium griseo-pallidum <i>Backeberg</i> nom. inval. (Art.8.2)	→ G.anisitsii var. griseopallidum → G.megatae ssp.
	Kakteenlexikon: 167, Abb. Seite 562 (1966).	
二つの分類学種に分かれる。一つの種は、G.megatae との密接な関係が疑われる。		
1966	G.pseudo-malacocarpus <i>Backeberg</i> nom. inval. (Art.8.2)	→ G.anisitsii var. pseudo-maracocarpus G.megatae ssp.
	Kakteenlexikon: 172 (1966).	
V.Schädlich 氏の仮説では、G.anisitsii の変種では無く、G.griseo-pallidum と同じ種で、G.megatae の亜種であるかも知れない。		
1971	G.tudae var. pseudomalacocarpus (<i>Backeberg</i>) <i>Donald</i> nom. inval. (Art.8.2)	→ G.anisitsii var. pseudo-malacocarpus G.megatae ssp.
	A Commentary upon the Gymnocalyciums from Alfred Lau (Part 1).·NCSJ 26(4): 96-100 (1971)	
同上		
1971	G.tudae var. viridis <i>Donald</i> nom. inval.	→ G.hamatum
	A Commentary upon the Gymnocalyciums from Alfred Lau (Part 1).·NCSJ 26(4): 96-100 (1971).	
1975	Gymnocalycium matoense <i>Buining & Brederoo</i>	→ G.matoense G.megatae ssp. matoense
	Gymnocalycium matoense <i>Buining & Brederoo</i> spec.nov.· KuaS 26(12): 265-268 (1975).	
ブラジル産の G.megatae の亜種と考えるのが妥当。		
1985	Gymnocalycium tudae var. bolivianum <i>Ritter</i>	→ G.megatae G.itatiquense
	Kakteen in Südamerika 2: 663, 823 (1980).	
二つの分類学種に分かれる。G.itatiquense については、G.megatae に含まれると言う考えも残る。Ritter が記述したものが、どちらの分類学種に近かったのかは、不明。		
1985	G.rotundicarpum <i>Fric</i> nom. nud.	→ G.megatae
	zit. in Meregalli, M.: Il genere Gymnocalycium Pfeiffer.·Piante Grasse 5(1): 41 (1985).	
1998	G.tudae var. marsoneri <i>Piltz</i> comb. nud.	→ G.marsoneri
	Piltz Samenliste 1998.	
2003	Gymnocalycium anisitsii var. griseopallidum <i>H.Till & Amerhauser</i>	
	Gymnocalycium 16(3) 2003 P523-P532	

2003	Gymnocalycium anisitsii var. pseudo-malacocarpus <i>Backeberg ex Till & Amerhauser</i>	
	Gymnocalycium 16(3) 2003 P523-P532	
G.anisitsii の変種よりも、G.megatae に関係するとの仮説がある。		
2009	Gymnocalycium marsoneri subsp. megatae (<i>Y.Ito</i>) <i>G.Charles</i>	→ G.megatae
	G.Charles: in: Gymnocalycium in Habit and Culture p. 241-245. (2009)	
G.marsoneri の亜種とすべき、具体的根拠を G.Charles は述べていない。		
2009	Gymnocalycium itatiquense <i>H.Till & Amerhauser</i>	
	Gymnocalycium 22(4) 2009: 891-896	
2010	Gymnocalycium megatae subsp. matoense (<i>Buining & Brederoo</i>) <i>H.Till & Amerhauser</i>	
	Gymnocalycium 23(4) 2010 : 959-968	
2010	Gymnocalycium megatae subsp. zecheri <i>Amerhauser</i>	→ G.megatae?
	Gymnocalycium 23(4) 2010 : 959-968	
有効に学術記載されたが、問題は残る。		

※ 太字は有効に学術記載された学名

参考文献

- 伊藤芳夫；サボテン 栽培と知識 Cacti (The growing and the knowledge) (1954)
- サボテンの知識と栽培法 Cacti(The knowledge of the cactus and the way of growing) (1956)
- 伊藤芳夫；サボテン図説 (Explanatory diagram of Austroechinocactinae) (1957)
- M.Cardenas；Die Cattung Gymnocalycium in Bolivien, KuaS (9) 1: 11-13 (1958)
- M.Cardenas；Die Cattung Gymnocalycium in Bolivien, , KuaS (9): 21-27 (1960)
- C.Backeberg；Cactus Lexicon (1976)
- F.Ritter；Kakteen in Südamerika Band I (Brasilien/Uruguay/Paraguay) (1979)
- F.Ritter；Kakteen in Südamerika,Band II (Argentinien/Bolivien) (1980)
- 日本カクタス専門家連盟、平尾博(編)；「日本サボテン史」 1989
- B.Schütz；Die Gattung Gymnocalycium(G.Hold, W.Papsch) (1992)
- H.Till & H.Amerhauser；Die Gymnocalycium des Gran Chaco und des der Savannen aus Argentinien, Bolivien und Paraguay III, Gymnocalycium 16(3) : 523-532 (2003)
- H.Till & H.Amerhauser；Die Gymnocalycien des Gran Chaco und der Savannen aus Argentinien, Bolivien und Paraguay Teil IX, Zur Klarrung von Gymnocalycium eytianum *Cardenas*, Gymnocalycium22(4) : 891-896 (2009)
- G.Charles；Gymnocalycium in Habitat and Culture (2009)
- H.Till & H.Amerhauser；Die Gymnocalycien des Gran Chaco und der Savannen aus Argentinien, Bolivien und Paraguay Teil X. Gymnocalycium megatae Y.Ito mit seinen Formen, Gymnocalycium 23(4) : 959-968 (2010)
- I.Milt；Web(Olomouc Cactus Club), <http://www.carciton.cz/kaktusy/clanky.htm>
- V. Schädlich；Web "Die Gattung Gymnocalycium", <http://www.gymnos.de/>

地図1 ; G.megatae関係種の分布 (Field番号情報による。)

